

Urban Design Lab. Magazine

2016.02.29 vol. 238



朝夕慣れにし学びの窓

T H E E V E R Y D A Y V I E W F R O M S C H O O L

修論特集 p.2
卒業論文・設計審査会 p.9

東京大学
工学部都市工学科 /
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

今月の編集担当：富田晃史 浜田愛
編集長：今川高嶺
編集委員：中島健太郎 高橋舜 中井雄太 浜田愛
黒本剛史 砂塚大河 富田晃史 王誠凱



座談会、修論発表を終えて

The Round-Table Talk After Finishing the Presentation of Master Thesis.

去る2月1日、2日に修士2年の7名が修論発表に臨みました。今回は座談会形式で、今川・高橋・滝澤・中島の4名に修論発表を終えておおよそ2週間経った今の心境や、研究生生活について振り返っていただきました。

(編集：M1 富田)

■修論発表を終えて

一簡単に一言で言えば、修士論文終わってどうでしたか？

高橋：漢字一文字で。

滝澤：おれめっちゃ楽(笑)

中島：「食」でしょ？

滝澤：「食」です。

高橋：そういうことじゃないでしょ(笑)

滝澤：そういうことではないのね。

高橋：達成感を一文字で表す？

滝澤：達成感一文字で表すって難しい？

高橋：「苦」とか、そういう感じ？

浜田：そういう感じです。漢字一文字じゃなくてもいいです。

今川：なんだろ、難しいな。終わったけど終わらんあ、みたいな。

高橋：いやほんとに、終わったけど梗概まだあるもん。

滝澤：まあ、来年もう一回出すしね。一応、

形上は。

中島：変えないの？

滝澤：もちろん、修正を加えて出す。提出から発表までの内容は勿論変わってるから、その内容反映させたくらいの変更は絶対すると思う。それ以上変えるかはちょっとわからんけど。

浜田：いつ終わるんですかね。

高橋：早く終わりたいね。

中島：いつ終わるんだろうね。

滝澤：だって修論の最後に「今後の課題」と書いてる時点で終わらないってことを示してるよね。

高橋：そういう意味では終わらないかもしれない。

浜田：達成感のようなものを感じられる瞬間はありますか？

高橋：発表翌日はほんとに達成感があった。その勢いで10日ぐらい遊びまくった結果、今梗概がなんにもほとんど手がついていない状況。意外と締め切りまでそんなに時間

がないんじゃないかってことで、今すごい嫌な気持ち。

滝澤：すごく分かる。提出終わってさ、中ボス倒して、発表終わってラスボス倒したと思ったらまだ裏ボスがいたみたいな感じやんな。

今川：しかも本だと永久に残るからね。

中島：おれは発表終わってもそんなに終わった感じがなくて。いや、なんかこう消化不良な感じだけが残るみたいな、そういう感じ。終わったときは追加調査しようと思っていたけど、そっか、発表が終わってから18日が過ぎてしまったのか、って簡単に言うと、そういう感じです。

今川：なんだろね。でも絶対こう「完成だー！」みたいな感じにはならない。どっかで妥協しなきゃいけない。残りの課題をはっきり書いてすっきりすればいいのかなあ。到達点をどこに設定するのか。

修士論文概要の紹介！

After Finishing the Presentation of Master Thesis

今川高嶺

遠郊外ニュータウン・あすみが丘における都市像の変容に関する研究

—周辺地域との関係性に着目して—

概要

遠郊外に位置するニュータウンの今後の方向性に対する示唆を得ることを目的に、その都市像の変容と要因・プロセスを周辺地域との関係性に着目して研究を行った。あすみが丘は、遠郊外ニュータウンの中でも周囲に市街化調整区域が広がる地域であったが、ニュータウンの設計はその内部で完結した都市像に基づいていた。しかし、その後の住民活動では、周辺地域とニュータウンが一体となった都市像のもとに、両地域の資源・課題を共有しながら今後の在り方を模索するような動きが見られ、都市像が変容しつつあることが明らかになった。

修士論文を終えて

ニュータウンの造成が終わって、大規模な空間形成も少なくなってきた現在の、都市を作る担い手は開発事業者から住民団体に移ってきているように思います。個々の住民団体の活動の背後にある意図や、そのことが意味することを注意深く考えて、都市全体が今どのように変容しつつあるのか、変容を望まれているのかを考えることはとても難しいですが、意義があり、そして面白いのではないかと考えています。



周辺地域とニュータウンを結ぶ、土気サタデーマーケット



渋谷政秀

築地場外市場の地域アイデンティティの変遷に関する研究：関係主体の協働に着目して

概要

2016年に移転予定の築地市場に隣接する、築地場外市場の近年のまちづくりを対象とした事例研究。築地市場移転を機に築地市場と共に担ってきた「卸のまち」としての歴史に地域のアイデンティティを見出し、それを軸としてまちづくりを展開していったのが近年の動きであったが、本研究ではその実態と成立要因、そして事例の特徴と言える地域アイデンティティの変遷とその変化の要因の解明を行った。最後に、そこから得られた知見を元に商業地域におけるまちづくりや、地域アイデンティティがまちづくりにおいてもつ意義について考察した。

修士論文を終えて

他の人もそうかもしれないけれど、問題意識がまずあったわけではなく「何がテーマになるのか分からないがこの事例を対象に論文を書きたい」ということから入ったため、切り口の設定に最後まで苦労しました。でもそうした当初の思いが、しんどい時でも進むモチベーションになったと思います。研究を通じて定性分析の面白さに触れられたこと、そして普段話を聞けないような方々にお話を伺えたことで、多くを学ぶことができました。



築地市場と場外市場が一緒にある最後の年末



研究室会議を大事にしてくださいということですね。

一年間ほんとに短いからね。

■研究テーマはこうして決まった

—研究テーマを決めるに至ったプロセスや、この人のこの一言で決めました、といったエピソードがあれば教えてください。

高橋：たつきーとかさ、研究テーマ大きく変わってないよね。

滝澤：そうね。

中島：今川さんも、全然変わってないよね。

今川：そうだね。俺は、遠郊外のニュータウンやりたいって所はずっと変わってないんだけど、それでもやっぱりちょっとずつ見えない所で変わっていったり、細部が詰められていったみたいな感じ。どんどん肉がついていくようなテーマの決め方だった気がします。

中島：まあなんかあれだよな、修論ゼミで先生に色々言われて変わるんだけど、多分最後、戻ったよね。

一同：(笑)

中島：最初にやりたかったことが少しずつ明確になって、戻るみたいなね。

今川：確かにね。

中島：多分たつきーもそうなんじゃないかなって気がするけど。

滝澤：もともと食べるのが好きで、旅行に行ったら必ずその土地の美味しいものを食べる。そこに人が暮らしている限り、絶対食って文化はあって、やっぱりそこに地域性みたいなものが出てくるとは思っていて、それを研究テーマとしてやるのはどうすればいいのかなと考えていた中で、西村先生が食と景観とか

の話はこういうのがあるよって教えてくれた。それで、食と景観のように互いに関わっている要素とかあるのかなって考えたときに、ツーリズムやいろいろ地域ブランドみたいなものがあるんじゃないかなと思いついて、そこからいろいろ文献とか漁って、ちょっとずつ補強していったっていう、そういう感じかな。

浜田：最初にやりたいテーマがあって、それに関しての情報を集めていった。

滝澤：そう。とにかく食、みたいな。

今川：確かにそうだね。やりたいことは明確だと思っていたけど、研究室会議のたびに「本当にそれがやりたいの？」って揺さぶられて、そこに自分なりに答えていながらやってきたが、確かに最終的に最初にやりたかったことに戻った。

中島：たかしゅんは？ちょっとずつ変わっていったと思うが。

高橋：もともと学部時からの関心で都市計画史の研究をしようと思っていた。それで、一年生の学年末ジュリー前の研究室会議で、西村先生から徳島の建物疎開の話聞いて面白そうだと思う、関係資料を調べてみると疎開について意外とまだ分かっていないことがポロポロ出てきた。当時の関心は非戦災都市の戦後の都市計画事業という非常にざっくりとした所にあったが、これを機に疎開というテーマに関心が定まっていた。以降細かい箇所はだいたい変わっているけど、結果的に非戦災都市の疎開がテーマとなったのはこの頃考えていたことがスタートになっていると思う。

中島：M1のときはそんなにやりたいこともなくて、渋谷プロジェクトでやっていることを研究室会議で発表していた。だけどこれでは研究としては難しいなと思っていた中、縁あって横張研の人たちとランドスケープ研究の編集に関わり、そのつながりもあって都市計画学会誌の編集に誘われたりして、そんな流れから、3月くらいにはテーマ自体はざっくりと決めた。決めてからは事例調査と枠組みつくりを並行しつつ、調査する上でどういう切り口がよいかを考えながら徐々に進めていった。

浜田：やっていた活動の中から方向性を決めていったということですか？

中島：成り行きで研究テーマが決まっていた感はあるんだけど、最終的には自分しかできないようなテーマを出来た気がする。

—M1が終わるタイミングで方向性は大体見えてきたのですか？

高橋：方向性が見えたというより、ざっくりとしたテーマが決まったかなあくらい。M2に入るとすぐに就活が本格的に始まって、時間がちゃんととりにくくなる。そういう意味でもM1が終わる段階で章立てまでは決まっていなくても、ざっくりとしたテーマくらいは決まっていた方がいい。

中島：根幹になる部分が決まっていなくて結局、研究室会議でその場しのぎになって全然深まる方向にいかないと思う。

高橋：それとか、1回1回の研究室会議に向けて自分自身で小さな目標を設けて前進できるような進め方が理想なんじゃないかな。滝澤：結局、自分のなかである程度は進んでいても他人からのフィードバックをもらわないと何やっていいかわからなくなる。そういう意味でも研究室会議を挟むとまた新たな方向性が見つかると思う。

中島：研究室会議を大事にしてくださいということですね。一年間ほんとに短いからね。

浜田：重い言葉ですね・・・。

富田：今川さんはどうですか。

今川：僕もM1が終わる頃にはテーマはある程度決まっていたが、M2の10月くらいに、研究の切り口とか手法がようやく分かってきて、その方向で研究を進められた。逆に言えばそこが分かんないとなかなか進ま



14号館1階のロビーにて

高橋舜

非戦災地方都市における建物疎開跡地の整備と継承に関する研究

—生産都市再建整備事業に着目して—

概要

W.W.II 末期に実施された建物疎開の跡地について新たな一次資料のレビューを中心に整備事業(生産都市再建整備事業)の実態を明らかにしながら、疎開前後の法定都市計画との関係性について分析を行った。資料レビューから3都市を抽出して事例研究を行い、戦前期の都市計画と疎開、整備事業の関係性を明らかにした。さらに整備路線について、現在の都市計画道路網に至る継承性に着目し事業後から現在に至るまでの計画的変遷を探った。この結果、整備事業時の計画的な位置付けと現在の状況の間に一定の相関が認められた。なお、現地調査からは整備路線に共通する空間的特徴を明らかにした。

修士論文を終えて

何になるのか自分でもよく分からない資料を1ページ1ページ撮影していくという今考えても気が遠くなる作業を夏の間にはできたことが、発表までこぎつけることができた理由かなと思っています。「無駄を惜しまずにやれることは全部やってみる」という、ある意味で都市デザイン研の血肉ともいえる経験を、研究で一通りできたことが、今回の研究を通じて得ることができた1番の大きな果実です。



富山県立公文書館に所蔵されている疎開関係資料



滝澤暢之

地域ブランドおよびツーリズムと地域景観との食を媒介とした相互関係性に関する研究

概要

人間の生活に不可欠な食は地域ブランドの構成要素であるとともにツーリズムの動機や目的となる地域資源であり、暮らしや生業を通じて地域景観とも密接な関わりを持つ。本研究では地域ブランド、ツーリズム、景観や生業が食を媒介としてどのように相互に結びついているかについて文献や既往研究から俯瞰的な概念図として導き、国内外の制度比較やテロワール食品間の特徴比較、フランスや日本における4事例のケーススタディを通じて食と各要素の相互関係性が地域の活性化や景観保全に結びついていく仕組みやそのポイントについて分析する。

修士論文を終えて

最初は食で地域活性化をしている事例に興味があったんですが、西村先生から食と景観の繋がりについてアドバイスを戴いたのが決め手になりました。B4時代卒業設計だったこともあり初めての論文に戸惑いもありましたが、自分の関心ある分野の知識をより深められたのは純粋に楽しかったです。テーマが漠然としていてももっと早い時期から色んな文献を読んだりあちこち足を運んでいたらより深められたのかなというのが反省点。



宇治茶最大の産地・京都府和束町の生業景観



テーマが決まっていないうちって深堀するのは無駄になるかもって感じることはある。

でも逆に一回突っ込まないと何も見えてこない。

ない。けどそのモヤモヤ感が必要で、そこからモヤモヤしながら、どういう切り口で研究を進めるか、悩みながら考えるのが大事な。

面白そうな事例からテーマを固めていたのか、あるいは、大枠のテーマは決まっています、そこから色々な事例を調べたのですか。

今川：両パターンあると思って、自分は元々、テーマと事例をセットで考えていたが、最終的にその事例でやると決めたのももっと後だった。他にももっと良い事例はないかとずっとアンテナをはりながら同時並行で進めていた。

高橋：僕の場合は最初に資料のレビューを徹底的に行い、テーマの1番幹の部分を整理した。その上で事例としてはここここが見れるなということで、最終的に3都市を決めた。

中島：僕は最初、堺と尼崎で結構おもしろいことをやってそうだとすることで調べていったが、結局おもしろいことをやっているとところを選びましたって研究は、特殊解を一個言っただけであって、一般的なことを言うのは難しい。だから最初は個別の事例から入っただけで、国内の鉄鋼所跡地を色々調べたり、共通の事業制度が無いか調べたりデータを蓄積して、最終的にあのような事例選定に行き着いた。逆に言えば、そのようにして最終的に事例が定まった時期が遅かったから、北九州とかはしっかり研究する時間がなかったのは反省。

今川：中島はまず事例を一個決めて、それについて深堀して、それに伴ってテーマもどんどん深くなったり切り口も分かったりと、それでまたテーマに戻って、またそれに合う事例を探してって、テーマと事例の行ったり来たりだったよね。

高橋：夏に堺に行っていたのはすごくよかったね。

中島：そうだね、テーマが決まっていないうちって深堀するのは無駄になるかもって感じることはある。でも逆に一回突っ込まないと何も見えてこない。実際に行くことでどういう場所が分かったし、人から話が聞けたり、そうして早い段階で人とのつな

がりをつくるのはすごい大事。そこで一回知り合っていると、何か聞きたいことがあったりしたときに、調べてもらえたりした。研究の進捗によって知りたいことや聞きたいことが変わってくるし、何回も調査しについてそこで人に聞いたりするのが必要になるから、そういう意味でも早めに現地調査をして、人のつながりを作っておくのは大事。

■研究手法へのアプローチ

一テーマが決まったあと、分析手法についてモヤモヤする期間があった、と今川さんがおっしゃっていましたが、結果的にどのようにしてその手法に行き着いたのですか。

今川：色々な人に幅広くヒアリングしたり先輩の研究を読んだりして、どういう手法があるのかを調べて、色々試してみた。最終的に、都市像というフレームで分析したのは先生にはいろいろと突っ込まれたが、都市の開発の歴史とその後の動きとをつなげてみて、今のニュータウンが何によって形成され、今後どこに向かおうとしているのかってこのを見る、というのが1番良い切り口かなと思ってやった。いつその手法に決めたのかはあまり覚えていない。

中島：結構直前だったと思うよ。発表聞いて、変わったなってびっくりした。(笑)

今川：最後の一月の研究室会議の発表した時に、調査で集めた材料はたくさんあったけど、それらが全然つながってなくて、説明したいことが説明できなかった。そこですごく反省して、一晩じっくり考えた。最後まで手法では悩んでいたけど、もっと早く決まっていれば、もっと効率よくヒアリングや資料集めができたのではと思う。

中島：修論ゼミで緑地でいけそうなんじゃないかという話になって、あれで決まったかな。中間発表のときに色々調べた何が言いたいのか分からないと言われて、結局それぞれのプロセスは事例ごとにバラバラだったけど、製鉄所跡地の緑地、というか今考えると空地だと思っただけで、空地がどうなったのかに着目すれば何か言えるのではってことでまとめた。

高橋：僕の場合は2つあって、1つは時間軸上で事業の立ち位置を見ること。具体的

には戦前戦後それぞれの都市計画事業との関係を分析する視点。苦しんだのがもう1つの視点で、これは研究室会議でも常々言われ続けた研究の現代的意義の部分の話。単純に対象箇所の現代までの状況を追ってみたりもしたが、なかなか自分の納得行くやり方が見出せなかった。年末に現地調査に行ってみると、計画としてはうまく行っていないが、空間的にもしるいものがあるということが分り、この空間的な面白さをどう論文にすれば良いのかとまたずっと悩んだ(笑)。そのまま悩み続けて、1/24に伸さんと話して「こういう空間の面白さがある、これって何なんですかねえ」って相談したら、伸さんに「それまさに都市空間の構想力の話なんじゃないか」と言われてハッとした。ここでようやく考えが固まった。論文の中ではしっかり言及はできなかったが、自分が導きだしたものにちゃんと名前をつけることができた。論文提出の2日前のことです。

中島：あれで論文がしまったよね。

高橋：うんあれで、論文の構成が自分の中でも分かりやすくなった。

滝澤：卒業設計は論文を書くのとは違って、対象敷地を歩いて、ある程度問題意識やコンセプト等を一通りまとめたうえで、設計して細かいところを直す感じだけど、論文になると根本的なところを行ったり来たりする機会が多い。レポートではなく論文としてちゃんとやるのは初めてだったから、そのプロセスがだいぶ時間かかるなと思った。

中島：僕は設計と論文は結構近いなと思ったところもあった。一月という直前期では、当然これまで築いてきた枠組みから考えるのだけど、バラバラと点在している調査をもう一回俯瞰で見て、ストーリーとしてくみ上げていく感じは、設計と論文で似てい



▲改めて読み直そうと思いました。

中島健太郎

大規模工場跡地の土地利用転換プロセスにおける緑地の役割に関する研究

—開発需要の低い臨海部高炉製鉄所跡地を事例に—

概要

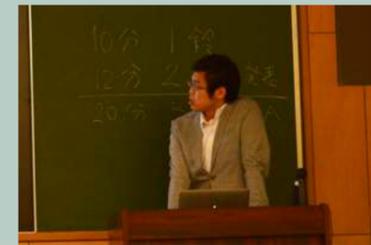
産業構造の転換により工場跡地が増加する中で、臨海部に立地するような開発需要の低い跡地では現行の制度がうまく機能していないのではないかと問題意識のもと、高炉製鉄所跡地を事例に土地利用転換プロセスの分析を行った。緑地創出を含む4事例の分析を通して土地利用転換プロセスの特徴とともに、都市計画事業によらない緑地整備があることが明らかになった。さらに、こうした緑地を含む製鉄所跡地の分析を通して、消極的な理由により整備された緑地がプロセスの時系列の中で土地利用転換を進める役割を担っていたことが明らかになった。

修士論文を終えて

「良い論文を書こう」と意気込んで始めるものの、終わってみれば何一つ満足に実証できていない自分に愕然とするわけですが、修士論文発表会で厳しい意見をいただいたことも含め学ぶことの多い期間であったと感じています。色々な方に意見を求め、もっと議論すべきであったと強く反省する一方で、無い知恵を絞りながらも自分なりに深めていった経験は貴重であったとも思っています。



製鉄所跡地に設えられた親水空間



羽野明帆

神田地域における商工業地の実態と変容に関する研究

概要

戦後復興期及び高度経済成長期における都心の商工業集積地の広がりを新たな一次資料を地図に落とし把握した。その結果、業種集積地がその関連産業を含めると今まで知られてきたより広く広がっていたこと、それらのフリンジ部が重なり業種混在地域を形成していたことが分かった。この業種混在地域について神田多町二丁目を事例とし、同じ新たな一次資料と火災保険地図の比定による空間再現を試みた。その結果、通りや街区単位で事業所の分布に特徴が見られ、町の歴史的背景と関連があることが分かった。

修士論文を終えて

体調管理ができていなかったこと、その後なかなか持ち直せなかったことを非常に後悔しています。またプロジェクトから研究にするという点では、プロジェクトの中ではインタビューや人付き合いから感覚的に分かってきたことをきちんと根拠づけることの難しさを改めて感じました。ただ、プロジェクトの中で個人的に掘り下げたことを、不十分な形にせよまとめられたことは、意味があったと思っています。



戦後印刷や染物長屋が集まっていた対象地の一面



お風呂入っている時とか、こう漠然と思考を巡らせているときに、
頭の中をうようよしていたものがぱっとつながった。

る。論文は思いの部分だけでは語れないの
だけだ。

■これをしてあげよかった

一研究をするうえで、これをしてあげよ
かったなと思うことを教えてください。

滝澤：個人的には文献を読むということ。
具体的なテーマを確定させるのはもっと後
でも良いが、ある程度のテーマが見えてい
て、その中からどう具体的なテーマを導い
ていくかをやる前の段階で、文献など手当
たり次第読むことをもう少しやりたかった。
今川：先輩の修士論文をもっと参考にすべ
きだよ。テーマとか似たようなもので探
しがちだけど、全然テーマは違っていても
分析手法のところ、こういう切り口があ
るのか、こういう方向でいけるんだと勉強
になるから。

滝澤：章立てや研究手法とか、それこそ対
象敷地がまだ決まっていないときでも、ジャ
ンルの近い文献や論文を読み漁って自分の
中で蓄積しておく、読み漁っているときは
全然意味ないように思えるが、ひらめいた
瞬間、蓄積していた知識が生きていたん
だなと気づいたから、そうした蓄積をもっ
と早くからやっていたらもっと内容が深め
られたのではと思っている。

浜田：どうい瞬間にひらめいたんですか。

滝澤：お風呂入っている時とか、こう漠然
と思考を巡らせているときに、頭の中をう

ようよしていたものがぱっとつながった。
今川：僕はもう少し勇気を持って、この分
析でやると決めて、一度形にまでするのを
もう少し早くやるべきだったかな。一度一
通りやってみて、フィードバックするとい
うプロセスを経ないと研究として深まっ
ていかないし、どういう方向性でやりたい
のかも定まらない。こうなのではと思ったこ
とを、その枠組みで調べて仮の結論にまで
持っていくことを早くやるべきだった。

高橋：とりあえずやってみようというのは、
早ければ早いほどいい。僕も5、6月の時点
で、具体的に何するか全然決まっていなかつ
たが、ひたすら5年×365日の官報をひた
すらエクセルに入力するという作業をして
いた。その結果、3章はそれをもとに組み立
てられその後も揺るぐことはなかった。

中島：その作業を通して、事例の選定が明
確になったよね。

高橋：その時は身になるかどうかは分から
ないけど、現地調査をしたり図書館で資料
見たり、自治体に問い合わせたりとかして
いるうちに、点で見たものが面のうちの
どこに位置するのかっていうのがなんとなく
見えてくる。

一最後に、何か一言ありますか。

中島：黒瀬さんに言われたことが印象に残っ
ていて、研究は起承転結でいう「転」がと
ても大事だということ。一般的に見てこれ

は大事ですねっていうのは誰でも分かるが、
細かく見なければ分からないような発見的
な、「転」の部分が研究では大事。転の部分
が見つけれなくて苦労はしたが、何の価
値もないと思われていたような草むらのよ
うな緑地が実は効果を発揮していたという、
強引な感じも否めないんだけど、そういう
「転」の部分はずっと発見したいと思っ
ていて、最後そこに着地できたのは良かった。
分かりきっていることの一步先みたいなの
を見つけるには、物事のウラまで知ろう
としなければいけないし、それはちょっと
偉そうなことを言えばうちの研究室だから
こそできることだと思う。

高橋：ほんとうにそうで、僕の研究は生産
都市再建整備事業がそもそも初出の事業で、
僕が調べてレビューすれば新しいことが分
かるから、学術的な価値という点では比較
的わかりやすいテーマだった。だけど、新
しいことが分かったね、ただだと自分の考
える都市デザイン研究室には今ひとつ物
足りなくて。直人先生にも度々言われた、
都市論の話なんかがかかなり響いていると思
うんだけど。なので、最後伸さんとの話で
空間のことが整理でき、自分の中で腑にお
ちました。

中島：それを見つけるためには今川君が言っ
てたようにたくさん悩む時間が必要なんだ
ろうな。

*

今回の座談会では、修論発表を終えた率
直な感想から始まり、研究テーマが決まっ
た要因や、具体的な研究手法にまで話は及
びました。悩み、もがきながらも修論に向
き合った先輩方から出てくる言葉は四者四
様でありながら、とても説得力のあるもの
でした。これから修士研究に取り組む人に
何か少しでも感じてもらい、明日への
研究のモチベーションにしていいただければ
という思いで、修論特集として座談会を記
事として取り上げさせていただきました。

お忙しいところ、座談会に参加して頂き
ありがとうございました！■



▲座談会前の談笑、東大工学部の前身である工科大学の初代学長であった古市公威像前にて。

森川千裕

東京都における中央卸売市場群の立地の変遷に関する研究

概要

東京都にある中央卸売市場において、中央卸売市場が設
置されてから現在までの立地の変遷を追った。社会情勢の
変化に伴い市場政策がどのように行われていったのか、こ
れを受けて中央卸売市場の立地は空間的にどのように変遷
していったのかを明らかにした。また、市場政策によって
統廃合が行われる中、中央卸売市場制定時から残っている
市場が存在しており、淀橋市場において、固定的な搬出域・
卸売市場機能の周辺への溢れ出し・社会的つながりが見ら
れた。



東京都中央卸売市場淀橋市場の様子

修士論文を終えて

このテーマを決めた理由は、テーマが決められない中、
卒業制作で淀橋市場について取り組んだ際に、ハードの提
案に偏ってしまい、中央卸売市場の存在意義について詳し
く調べることが出来なかったという反省があり、また取り
組んでみようと思ったためです。率直な感想としては、相
談に何度もお世話になった先生方、何から何まで支えて
くれた同期のみんな、手伝ってくれた後輩たちに、本当に
感謝しておりますの一言に尽きます。



修論発表後、神田の王府酒家で打ち上げが行われました!!





卒業論文・設計審査会

The Final Defense of Graduation Thesis.

2/15・2/16 に卒業研究の審査会が実施されました!!

修論発表に続く2月15日、16日には学部生の卒業研究審査会が実施され、都市デザイン研究室からは三文字・小林・中村・松田・藪田の5名が卒業設計に挑みました。各々の良さや特徴を活かした個性的な作品が出そろいました。

SAMMONJI MASAYA 三文字昌也

「沁透街巷」—台湾台南市における都市空間の漸進的更新設計

設計概要

台湾台南市で明確に分かる二重の「皮・餡」構造を小籠包の「籠・皮・餡」と読み解き、断絶された街区のオモテとウラを蒸し沁透させるというコンセプトの設計を行いました。



卒業設計を終えて

分析とコンセプトはそこそこ面白いレベルまで行ったと自負しています。しかし具体的な提案がちょっとまだ満足いきません。建築ではない都市工学なのだ、ということでデザインランゲージ的な提案となったのですが、もう1段階も2段階も具体的に落とし込むべく練られたはず。幸いにしてまだ機会があるようなので、まだ少し考えてみたいと思います。



MATSUDA Kishiko 松田季詩子

住み人知らず 新しい街で計画の「はざま」と「先」を考える

設計概要

江東区辰巳にて、辰巳団地の建て替えと展望を設計する。既存住民の豊かな使用を増進するように空地に可変性を設けるとともに、わずかに高層化した分の空気にコロニー状に新規住民を入れ、長期的に周囲と馴染ませる。



卒業設計を終えて

運河の両岸に横たわる辰巳と東雲を見たことが対象敷地を決めるきっかけになったのに対し、実際の設計は辰巳団地内という小スケールになりました。描く未来像の範囲も方向性も五里霧中の中で導いた、人々の生活が「その人々にとって」豊かであるにはというテーマは、今後も深め、ちゃんと伝えるように表現したいです。勉強が全然足りないですね…。



NAKAMURA Shingo 中村慎吾

古都を興す奈良スクエア

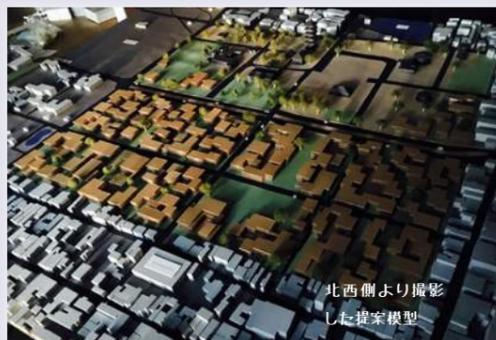
設計概要

かつての興福寺境内であり、県庁舎や文化会館などの大規模施設が集積する地区において、近代化の流れを反省して建物や空地を人間スケールに戻しつつ、諸機能の混在を図って新たな奈良の中心の在り方を提案しました。



卒業設計を終えて

卒業設計がいざ終わってみると、もっと熱心に取り組めたのではないかと後悔の念が湧いてきますが、土地の見方やコンセプトの立て方について一定の時間と労力を割いて考えてみるという経験ができたことは大きな収穫になりました。大学院で研究するテーマは未定ですが、卒業設計で得たものをうまく生かしていければと思います。



YABUTA Kohei 藪田航平

「訪れる海」から「すまう海」へ 須磨の海岸をまちとつなぐ道

設計概要

対象地は神戸市須磨区の須磨駅周辺地区です。須磨は海と市街地との距離が極めて近く、両者の関係を強化したいという意識から、須磨の海を訪れた人が「すまう」ようになるための提案を行いました。



卒業設計を終えて

中高合わせて6年間住んだ地でしたが、調べれば調べるほど、須磨について何も知らなかったことに気付かされました。設計は主に観光客目線で行いましたが、どうしても住民側に立ち位置が寄りがちで苦労しました。発表前2ヶ月は本当にしんどかったです。設計を幾分面白いと感じられるようになった点で、設計を選んでよかったと思っています。



KOBAYASHI Risa 小林里瑛

「ここはかつて『皇居前広場』と呼ばれていたらしい」

設計概要

皇居前広場を対象に、ある特定の時代のイデオロギーが付与したイメージが漂う敷地に対してそのイメージを更新する事を目的に、隣接する都市を物理的にも心理的にも近づけるべく濠というエッジ部の設計を行った。



卒業設計を終えて

special edition と呼ぶべき分岐が大量にあり、シナリオの選択に多大なる労力を費やした結果、実際の設計を十分に検討する時間を取れなかった。またシナリオにおいても伝えたい事を充分まとめ切ることができなかった。しかし過程において何度でも挑戦したい、と思えるほどの愛着が湧いた設計であった。



◀卒業設計審査会の前夜、演習室の様子。夜通しで先輩方とともに作業が進んでいます。



◀打ち上げ後は演習室に戻って延長戦が行われ、西村先生からコメントをいただきました !!

卒業制作の発表は1月末からの一連の論文審査会やジュリー続きの一番最後のタイミングで実施されるため、提出前夜は修士生や卒論発表の終わったB4の同期、お手伝いの下級生やお友達のヘルパーさんなどが2F演習室に大集結し、わいわいとお祭り騒ぎで最後の仕上げが行われました。B4の皆さんも長期戦で非常に体力も精神も消耗している様子でしたが、発表後は疲れ切った表情の中にやりきった清々しさがあふれ出ていました。B4の皆さん、お疲れ様でした!! (編集:M1 浜田)

Information

2月のウェブ記事



第二回さわらぼ活用アイデア会議

1月30日に行われた、「第二回さわらぼ活用アイデア会議」の活動報告。

3月の予定

- 3/18 クリス先生送別会
- 3/19 佐原PJ: さわらぼ報告会
- 3/24 研究室追い出しコンパ
- 3/29-31 神田PJ: 多町報告会

✦ 編集後記

富田 晃史

卒業式の歌として有名な「仰げば尊し」の3番の冒頭で、「朝夕馴れにし学びの窓」と詠ってます。PJや研究室会議発表の準備など、研究室で幾度も夜通し作業をした先輩方にとっては、9階エレベーター横のガラス窓から見える朝焼けや夕焼けは、これまでの研究室生活をどこか想起させるような、見慣れた風景となっているのではないのでしょうか。表紙の写真は、都市デザイン研究室で過ごしてきた先輩方に共通する風景は何かないものかという思いから決めました。